



# よみがえ 蘇る大友宗麟の栄華

この春、顕徳町に復元されたのは大友宗麟が造り上げた大庭園

遺跡の発見から発掘、調査、研究、そして復元まで、その工程はとてもドラマチックで、発見された事実はとてもダイナミックなものでした。地中には、22代の栄華を誇った大友家と、21代当主宗麟の功績が地層のように重なり、発見されるのを待っていたのです。450年もの歴史を遡って復元された大庭園、その詳細を紹介します。

文化財課 ☎537-5682

大友館復元イメージ(CG)



大友宗麟 (1530-1587)  
今から約450年前の戦国時代、豊後府内(現大分市)を本拠地として、北部九州6カ国を治めていた戦国大名。名門「大友家」の21代当主として、フランシスコ・ザビエルと出会い、海外との貿易を積極的に進めたことで、府内の町には、西洋の医学や天文学、音楽や演劇など多くの文化がもたらされ、日本でいち早く南蛮文化が開花しました。

## 巨石発見が 大庭園発掘のきっかけに

顕徳町に残る「大友氏館跡」。ここは、日本国内はもちろんヨーロッパでもその名を轟かせた大名、大友宗麟の一族が暮らし、政治などを行っていた広大な屋敷の跡地で、現在も発掘調査が続けられています。

実はこの「大友氏館跡」の発見のきっかけになったのは、1996(平成8)年に顕徳町の工場跡地で見つかった巨石でした。それまで、江戸時代初期に描かれた地図「府内古図」から「この辺りに大友家の館があったのでは？」という予測はあったのですが、詳細は分かっていなかったのです。1998年に本格的な発掘調査が始まると、徐々にその全貌が明らかになってきました。

それから20年の歳月をかけて発掘調査、研究が重ねられ、発見のきっかけとなった庭園の復元整備工事が、今年完了しました。「大友氏館跡」の全貌も、少しずつ分かってきています。大友氏がこの地に屋敷を築き始めたのは、14世紀後半の10代目当主のころです。以降増改築を繰り返しますが、21代目当主の宗麟が財力や知見を生かし大幅な改修を行い、大庭園が造られたと考えられています。そしてその規模は、織田信長も生きた戦国時代末期の戦国大名館に匹敵した庭園として、最大級のものであることが分かったのです。

この庭園にある大きな池は、景色が東西で異なることが特徴で、その景色を眺めるための建物が数棟あったと考えられています。茶の湯もかなりの腕前で、千利休から「なかなかの数寄者」とも言われた宗麟。訪れる客人をもてなすために、大規模な庭園を造ったのかもしれない。ザビエルもこの大友館に招かれ、この地で宗麟と出会っています。



調査中の大友氏館庭園跡(2016年)



庭園跡調査状況写真(1998年10月)  
左下に見えるのが庭園の池を構成する巨大な景石で、重さは1~3トンにもなります。右手の線路は、鉄道の高架化が行われる前のJR日豊本線。



庭園跡調査状況写真(2015年10月)  
鉄道の高架化が完了し、2012年から2016年にかけて庭園の整備に向けた全面発掘が行われました。写真は池の東側の発掘調査状況。



景石(池の西側) 調査中



整備後



庭園跡出土の茶道具類  
庭園の池からは、さまざまな遺物が発見されました。写真は館で使用されていたとみられる茶道具です。白く見える器は中国産陶磁器の掛花入(床の間の柱などに掛ける花入)で大変希少な遺物です。